

浩翁軒外感風吟

三ノ下ニ至

上面 孝女六面 新衣等件

修寺記

經

同前

卷之四

r

日

Р

上卷
卷之六
卷之六

457

上
步
七

上

人

...

上
福
以
冬

中

月

萬
り

1

子云仲冬中氣至之日

まゝのト
きり八分

卷之九 金石錄

文禄元年九月廿五日

浩翁軒九感領分書上（良正院文書）

慈一覽令知恩院
 當月各書狀就
 炎燒方丈文書
 用隔障板之覺
 外之書名之及
 昌翰之元之書
 一入書之元之
 一炎燒之覺
 一方丈大小
 一衣寮三
 一廊下之
 一庫裡大小
 一衣舍堂
 一衣所新堂

良正院宗把書狀案 (知恩院炎燒之覺)

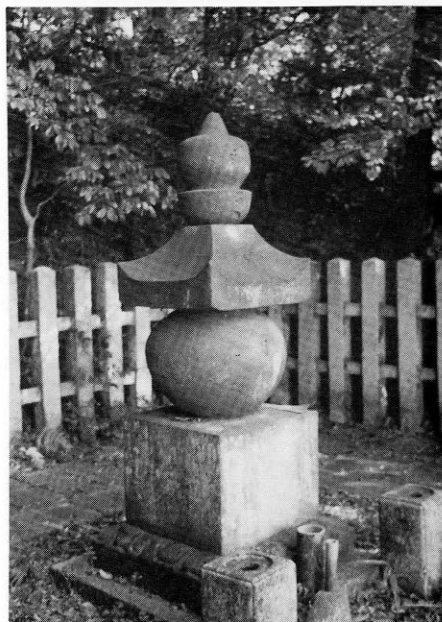
善仁方之書
 一事在流線
 早速 給旨
 原載之書元
 肝葉之書
 早下之書
 觀智國師

觀智國師源書狀

觀智國師源書狀



池田忠雄書状



良正院夫人墓（知恩院山内）



良正院夫人御影（良正院本堂）

知恩院塔頭良正院の草創

附、良正院古文書選

水 野 恭 一 郎

一

知恩院の黒門を西へ下りて、すぐ右手、古門通りの北側最東端に位置して、塔頭良正院がある。良正院の寺名は、播磨国姫路城主池田輝政夫人の法号に基づくもので、同寺はこの良正院夫人の菩提を弔う寺院として興されたものである。

良正院夫人は、徳川家康の第二女で、督姫（とくひめ）といい、生母は鵜殿氏西郡局、永祿八年（一五六五）の生れである。^①天正十年（一五八二）甲斐の武田氏滅亡後、武田の旧領の処分に関して徳川家康と小田原の北条氏が対立したとき、その和議の条件の一つとして、翌年天正十一年八月、督姫は十九歳で、小田原城主北条氏直に嫁した。^②同年八月十七日付で氏直の父氏政が、徳川家康に送っている書状に、「此度御興入成就、誠大慶満足、何事歟可過之候哉」と述べて、大慶満足の意を表明しており、この時期、督姫の興入は、徳川・北条両氏和睦の重要なきづなとなつたのである。^③

しかるに、その後、天正十八年（一五九〇）七月、豊臣秀吉の小田原攻めによって、小田原城陥落の悲運に遭い、

氏直の父氏政は、その弟氏輝とともに自殺した。しかし城主氏直は、その際、夫人督姫の縁によって一命を助けられ一時、高野山に蟄居せしめられたが、やがて許されて河内の天野に移され、一万石の所領も与えられたが、天正十九年十月、大坂において疱瘡を病んで死去した。『多聞院日記』（天正十九年十月二十九日の条）に、「相州保条氏直、在大坂ニ、近日疱瘡煩フ、祈禱也ト云々、遂ニ死去云々」と、その死を伝えている。三十歳であった。

かくして、氏直の死によって寡婦となり、また子息もなかった督姫は、徳川家に帰ったが、それから三年後の文禄三年（一五九四）に至って、豊臣秀吉の仲立ちによって、そのころ三河国吉田城主であった池田輝政に再嫁することとなり、『言経卿記』（文禄三年十二月二十七日の条）に、「江戸亜相息女（徳川家康）北条氏直（輝政）後室、池田三左衛門尉へ、今夜嫁娶也云々」と見えているごとく、十二月二十七日、池田輝政夫人として輿入れした。時に督姫は三十歳であった。

輝政には正室として、摂津国茨木城主中川清秀の娘があつたが、この中川氏は天正十二年（一五八四）輝政の嫡男利隆を生んでのち病身で、生家中川家に帰って病を養ひ、文禄三年のころは、この年秀吉から豊後の岡城主（竹田城）に封ぜられた弟中川秀成の許にあつた。したがって、秀吉の仲立ちによって輝政に嫁した督姫は、継室ではあつたが、事実上は、このころ輝政の正室の地位にあつたといつてよい。

輝政夫人となつてのち、督姫は、慶長四年（一五九九）輝政の二男忠継を生んだのをはじめとして、忠雄・輝澄・政綱・輝興の五人の男子を儲けた。その間、夫の輝政は、慶長五年関ヶ原の役における功績によって、三河吉田城主から、新たに播磨国五十二万石を賜わつて姫路城主となつた。次いで慶長七年、同じく関ヶ原の役のあと宇喜多氏にかわつて備前岡山城主に封ぜられていた小早川秀秋が死去し、嗣子なくして家が断絶すると、その跡の備前国二十八万石は、多くの大名たちの望みを斥けて、慶長八年二月、督姫の腹に生れた池田忠継に与えられた。忠継は、このとき年齢いまだ五歳であり、この異数の賜封は、まさに督姫の縁によるものであつたといつてよい。しかし備前では、忠継いまだ幼少であることによって、輝政の嫡男である異母兄利隆が姫路から岡山城に入つて、備前のことを監した。

次いで慶長十五年二月には、忠継の弟忠雄（九歳）に、また淡路国六万石が与えられた^①。これもまた生母督姫の縁によるものであろうが、これらは事実上は、父輝政への加封と同じであって、この二男忠継・三男忠雄へ与えられた封地を合わせると、輝政の所領は、播磨五十二万石に加えて、備前二十八万石、淡路六万石、都合八十六万石を領する西国随一の大大名となった。そして慶長十七年には、家康から松平の姓をも許されたが、その翌年慶長十八年（一六一三）正月、輝政は中風のため姫路城で死去した。年齢五十歳であった^②。輝政の死後、池田氏の所領は、播磨国内、宍粟・佐用・赤穂三郡を除く、播磨十三郡約四十二万石が嫡男利隆に譲られ、二男忠継は備前一国二十八万石と上記の播磨三郡を合わせて三十八万石、三男忠雄は引きつづき淡路六万石を領することとなった。したがって、この時、それまで備前国を所管していた利隆は岡山から播磨姫路に帰り、かわって忠継が岡山城に入って、督姫の実子が事実上の岡山城主となった。

二

輝政の死後、督姫は仏門に入って法号を良正院と称したが、慶長十九年の冬には大坂冬の陣が起り、利隆・忠継・忠雄も、家康の陣に馳せ参じた。そして同年の暮、東西兩軍の間に一応の和議が成ったころ、督姫は姫路から上洛して、京都の二条城に父家康を訪ねたのである。『良正院文書』の第三〇・三一・三二・三四・三五・三六号文書など、いずれもそのことを伝えている。督姫の上洛の日は明白ではないが、『駿府記』によれば、家康が和議成つてのち二条城に凱旋したのが慶長十九年十二月二十五日であり、年明けて慶長二十年正月三日には、二条城を発して駿府へ帰っているから、督姫が上洛して二条城に父家康の労を見舞ったのは、その間のことと見てよい。

そして家康が正月三日二条城を発して駿府へ帰ったのち、督姫は発病して、二月五日、二条城において死去したのである。『駿府記』の慶長二十年（七月改元元和元年）正月晦日の条に、

京都板倉伊賀守飛脚到来、申云、自去廿二三日比、播磨輝政御後室御庖瘡云々、
(所司代)
 と見え、次いで二月八日の条に、

京都自板倉伊賀守、飛脚到来、去四日曉寅刻、良照院殿(正)播磨国輝政御後室者御娘子也、御死去云々、

と記され、正月二十二・三日頃から庖瘡を患ひ、二月四日早晩に死去したと伝えている。ところが『義演准后日記』には、

正月晦日、備前之御前(庖瘡)ハウサウ御煩、年被及四十余歳故、以外大儀云々、

二月五日、昨日良生院煩尋遣ス、同篇云々、良生院今朝遠行由注進、不慮、

とあり、『本光国師日記』にも、二月五日の条に、「今日五日、良照院殿、二条之御屋敷にて御遠行也」と記され、いずれも二月五日の死去として、『駿府記』の伝えと一日違っている。そのほか『池田氏家譜集成』や『寛政重修諸家譜』、また『良正院文書』の諸記録など、二月五日の逝去としているものが殆どであるが、このことについては『池田家履歴略記』に、「実ハ四日の曉成しか共、五日発喪と、京都板倉勝重より駿府に注進有しよし、駿府政事録に出づ」と記されているのが、恐らく真実を伝えているものであらう。享年五十一歳であったが、死因が先夫北条氏直と同じ庖瘡であったことは、奇しき因縁というべきであらう。

督姫の葬儀は、『良正院文書』第三〇・三四・三五・三六号文書に伝えるごとく、父家康の上意によって、知恩院において、時の住持満誉尊照を導師として執り行われ、知恩院の裏山に埋葬された。法名は良正院隆誉智光慶安大禅定尼という。葬儀のあと、督姫の御影および位牌は、知恩院の方丈に安置されていたようである。

一方、督姫が京都で死去してから十八日後の慶長二十年（元和元年）二月二十三日、大坂冬の陣から本国備前岡山に帰って間もない池田忠継が、岡山城において死去した。『駿府記』（慶長二十年二月二十八日の条）に、

二月廿八日、從備前、飛脚到来、去廿二日曉、松平左衛門督、依庖瘡死去之由、本多上野介言上、令驚給、甚御(三九)
(池田忠継)

愁傷

と見えているように、母督姫と同じ疱瘡によってであった。あるいは、京都において母から感染していたものであったかも知れない。年いまだ十七歳であった。

この忠継の死によって、同年六月二十八日、弟忠雄（十四歳）がその遺領を嗣ぐこととなり、淡路由良城から移って備前岡山城主となった。^⑧このとき忠雄は、忠継の遺領の内、備前一国二十八万石と、母督姫の化粧料であった備中国浅口・窪屋・下道・都宇四郡の内三万五千石をも合わせて、三十一万五千石を領し、忠継の播磨三郡の遺領は、輝澄・政綱・輝興三人の弟に分与されている。

なおまた、その翌年の元和二年六月十三日には、輝政の嫡男で播磨姫路城主であった池田利隆が死去した（三十三歳）。そして、その嗣子光政が、いまだ八歳の幼少であったため、播磨は中国の要地、領主幼少にては叶うべからずとの理由で、翌元和三年六月、山陰の因幡・伯耆両国に国替えとなつて、因幡鳥取城に移り、ここに池田氏は、忠雄の岡山池田藩と、光政の鳥取池田藩とに分かれることとなった。

三

池田忠雄は、生母良正院（督姫）死去のころは、いまだ淡路由良城主であったが、『良正院文書』第三一号「慶安寺良感書上」・第三二号「慶安寺興譽書上」によれば、忠雄は、母良正院の死後、由良城下の専称寺に母の位牌を立てて、その菩提を弔っていたが、兄忠継の死によって備前岡山城主となるとともに、専称寺も岡山城下に移し、やがて母の法号に因んで、山号寺号も改めて、智光山良正院慶安寺と称したという。^⑨

しかし、良正院夫人の実子で、いまや備前池田家の惣領となった忠雄は、母の埋葬の地である京都の知恩院山内にも、母の菩提のための一寺を新たに興したいとの願いを持ち、そのことを、母の弟にもあたる將軍秀忠に願ひ出て許

された。『良正院文書』第九号の、良正院宗把老宛、池田忠雄の書状は、そのことを伝える文書であって、

為良正院殿御追善、（徳川秀忠）相国様江窺之上、其寺建立候、御供養米五拾石、永々可差贈候、猶於御仏前、武運長久・国

家安全之祈願願入候、永其寺可為檀那候、恐惶謹言、

十一月朔日

宰相

忠雄（花押）

良正院
宗把老

とある。この文書には年号の記入がないが、文中に「相国様」とあるのは徳川秀忠で、秀忠が相国すなわち太政大臣に任官したのは、寛永三年（一六二六）秀忠および將軍家光が京都に上洛して参内し、九月後水尾天皇が二条城に行幸された時であり、また忠雄の署名に「宰相忠雄」と記されているが、忠雄が宰相すなわち参議に任官したのも、同じ時、將軍家光の上洛に供奉した際である。したがって、この忠雄の書状は、少くとも寛永三年以後に書かれたものであることは明らかである。更に、この書状の宛名は「良正院宗把老」となっているが、宗把が住職であった知恩院塔頭の寺名は、もと浩翁院であって、『良正院文書』の第八号文書、寛永六年結夏日（四月十五日）に記された浩翁院規式に、院主宗把自ら「浩翁院主宗把」と署名しており、そのほか、寛永六年以前に書かれた文書に出てくる寺名は、すべて浩翁院であって、良正院の寺名は見えない。

一方、『良正院文書』第一〇号の宗把書状は、新しい良正院の造営完成のことを伝えているものであるが、その日付は閏十月廿五日であって、この前後で十月が閏月である年は、寛永八年（一六三一）以外にない。したがって、宗把の新しい住房良正院の建立が成就したのは、寛永八年であったことは確かである。そして、この書状の文中に、前記の忠雄の書状の中の言葉を引いて、「從宰相様被仰付候武運長久・国家安全之祈願、永可抽丹誠候」と述べていることからすれば、忠雄の書状は寛永八年閏十月以前ということになる。このことと、第八号文書の「寛永六年結夏日、浩翁院主宗把」の署名とを併せ考えて、第九号文書の池田忠雄書状は、恐らく寛永七年のものと推定して誤りないと

思われる。

このことからして、いま一度、この忠雄書状の内容を検討してみると、將軍秀忠の相国すなわち太政大臣の任官は寛永三年であつても、忠雄が秀忠に母の菩提寺建立の窺いを立てたというのは、それ以前であつたことは可能である。良正院の寺伝では、『良正院文書』第三〇号の覚書案によれば、督姫の逝去後四年目に忠雄が秀忠に窺いを立て、寛永元年に新しい良正院の普請が成就したとしている。そのほか第三三号文書も寛永元年造立としているが、新しい良正院の建立を寛永元年とするのは誤りであつて、正しくは寛永八年であることは前述の通りである。しかし將軍秀忠に新院建立の窺いを立てて許しを得たのは、第三五号文書にも記されている元和四年であつたということは必ずしも疑えない。第四〇七号文書の、岡山の報恩寺が本山知恩院への継目御礼が遅延したことについての取成しを、浩翁院住持宗把に依頼している寛永三年の一連の文書は、そのころ以前から、岡山の池田家と浩翁院の間に深いつながりのあつたことを示すものである。

以上、種々の点から推量して、池田忠雄が岡山城主となつたのち、元和四年ごろ、知恩院山内に母良正院の菩提寺を造立することを、將軍秀忠に願ひ出、秀忠の許しによつて、そのころ知恩院の役者として有力な存在であつた宗把の住房浩翁院が、良正院夫人の菩提所に当てられることとなつた。しかし、新しい寺院の造営は、やや遅れて、寛永七年から八年にかけて、漸く新寺院の建立が完成され、この時、忠雄から供養料五十石も寄進され、同時に、寺号も浩翁院から良正院に改められたものと見てよいであらう。

浩翁院そのものの起りは明らかではなく、第三三号文書では、「良正院開基」として、「文祿二年九月廿五日、昔年者、浩翁軒善譽九感大徳建立」としているが、この記事は、第一号文書の、知恩院領の内「浩翁軒九感領分」の書上に基つて記されているものであつて、全く浩翁院の草創を伝えるものではない。ただし、この第一号文書によつて、浩翁院の草創が少くとも文祿二年（一五九三）以前に溯るものであり、文祿二年当時には知恩院の塔頭として、

計九石二斗余の寺領を保有する寺院であったことは知ることができる。

このころは寺名も浩翁軒であるが、宗把は恐らく九感のあとを継いで同寺の住持となり、宗把の代には寺名も浩翁院となったものであらう。そして宗把はまた、知恩院の役者としても有力な存在となっていたことは、第二号文書の観智国師の書状や、第三号文書の増上寺正誉廓山、第一九・二〇号の増上寺曉誉の書状、第二一・二二号の所司代板倉重宗・老中阿部重次の書状などからも窺えるところで、そのような傑僧宗把の住房である浩翁院が、池田忠雄の願いによって、良正院夫人の菩提所として選ばれることになったものであらう。しかし前述のごとく、浩翁院の地に改めて新寺が造立されて、寺名も改められた新しい「良正院」の草創は、寛永七・八年とすべきである。

四

新たに造立された良正院の様子については、第一〇号文書の、(寛永八年)閏十月二十五日付で宗把が岡山藩の宿老に宛てた書状に詳しく、新しい良正院の堂舎の完成を伝えるとともに、その新寺の莊麗さを記して、「貴賤の諸人、寺拝見仕り、上方無双の御建立たるの旨、申候て戴き申候、永代浄土一宗の外聞、これに過ぎざるの由、知恩院も申さる」といい、また「座敷金の間、殊さら絵の儀、三益筆勢を振われ、京都見物の貴賤、是れまた目を驚かし候、慮外ながら、宰相様(池田忠雄)の高覧に達したく存じ奉り候」とも述べている。

なお、この書状の中で、良正院の障壁画に筆をふるった絵師の名を、三益と記しているが、この三益なる絵師については十分明らかでない。第三六号文書の「良正院由緒記」の中には、「張付画、狩野三益筆」と記しており、残されている障壁画の画風からしても、狩野派の絵師であることは確かであるが、三益を称した人物は確かめ得ず、寺伝では狩野山楽とも伝えているが確証はない。

かくして池田忠雄の宿願であった知恩院山内における母の菩提寺の造立は、寛永八年、新しい良正院の創建となっ

て実現されたのであるが、その翌年の寛永九年四月三日、忠雄は江戸において死去した（三十一歳）。病氣は、母良正院夫人、兄忠継、更には良正院夫人の先夫北条氏直と同じ疱瘡であった。遺骸は江戸から本国備前岡山に送られて、城下の禅刹龍峰寺（のち国清寺）の塔頭清泰院に葬られた。法号は清泰院仁秀良勇という。

忠雄の死後、その嗣子光仲は、いまだ三歳の幼少であったために、先年の姫路城主池田利隆の死去の場合と同様に、備前は山陽道の要地であることを理由に、今度は岡山と鳥取の両池田家の間で国替えが行われ、この年（寛永九年）六月、池田光政が鳥取から移って岡山城主となり、池田光仲は岡山から移って鳥取城主となった。かくして新しく創建された良正院は、造立後一年をいわずして、備前岡山藩との関係を離れ、このち長く因幡鳥取藩主池田家の菩提寺となったのである。

五

良正院に伝存する古文書の中で、今一つ注目される重要なものは、良正院の造立完成後およそ一年半、寛永十年正月九日に起こった知恩院炎上に関連する文書である。すなわち『良正院文書』第一一号・一二号の良正院主宗把の書状案、および第一三号の増上寺役僧源察等の書状である。

第一一号文書は、良正院主宗把が、知恩院炎上の日の様子を、江戸増上寺の役僧源察・九達に宛てて書き送った書状の扣で、「知恩院炎焼之次第」と題して、正月九日の夜亥刻、知恩院の方丈から出火とともに、馳せつけた宗把が、動顛している病身で高齢の知恩院住持雄誉靈巖を助け出し、宝物等を運び出したさまや、方丈・御影堂炎上の様子、また知恩院炎上について、幕府から如何なる咎めがあるであろうか、殊に当時江戸に在府中であった京都所司代板倉周防守重宗の胸中をおもんばかって、寺中の諸人が不安にかられている様子などが、まざまざと書き記され、第二二号文書には、その日焼亡した堂舎が大方丈・小方丈・衆寮・庫裡・衆会堂・大御影堂などであり、古阿弥陀堂・勢至

堂・経藏・山門・宝藏・黒門・惣門、すべての塔頭などは無事であることを伝えている。また第一三号文書には、江戸増上寺でも、知恩院炎上のことは、早く京都所司代の内衆からの急報により、在京中の所司代板倉重宗を通じて聞き、みな夜も寝られぬほど案じているなどの様子を報じている。知恩院炎上当時の詳細な記録の、あまり残されていない中で、これらの文書は、その情況の一部を伝える貴重な記録であるといつてよい。

以上、知恩院の塔頭の一つ浩翁院が、池田輝政の継室で、徳川家康の第二女であった督姫、法名良正院の菩提所として、新たに寺名「良正院」と改まって造立された歴史的事情について概観したが、その間、当院の院主であったのは深蓮社願誓宗把得入であつて、この宗把和尚は、まさに良正院の中興開山の名に価する僧侶であり、また、この時期、知恩院の役者としても、満誉尊照・城誉法雲・然誉源正・雄誉靈巖四代の住持を輔けて、知恩院の寺中に重きをなした存在であつた。寛永六年に自ら制定している「浩翁院規式」なども注目に価するものであろう。良正院は、その後、長く知恩院塔頭の筆頭の地位を占めたが、その基礎は、この宗把の時代に築かれたものといつてよいであらう。良正院創建後十六年、正保四年（一六四七）十月十三日、宗把はその生涯を閉じた。

註

① 『徳川幕府家譜』、『池田家履歴略記』文禄三年甲午「良正院殿入興」の条。

② 『寛政重修諸家譜』巻五〇五「北条」。

③ 『大日本史料』第十一編、天正十一年八月十五日の条所載「名将之消息録」所収。

④ 『寛政重修諸家譜』巻五〇五「北条」。

⑤ 『寛政重修諸家譜』には、十一月四日天野において卒すとしている。

⑥ 『池田氏家譜集成』三〇「因州鳥取慶安寺略記」、『池田家履歴略記』文禄三年甲午「良正院殿入興」の条。いずれも八月十五日興入としているが、この日婚儀が整い、十二月二十七日に興入れが行われたのである。

⑦ 『寛政重修諸家譜』巻二六〇「中川」、『池田家履歴略記』天正十二年甲申「大儀院殿婦中川家」の条。なお中川氏は、このち引きつぎ豊後岡城に在って、元和元年十二月二十二日、同城において死去した。法名は大儀院殿湖山明鏡大姉という。

⑧ 『池田家履歴略記』慶長五年庚子「関原合戦、移封播磨」の条、『寛政重修諸家譜』卷二六三「池田」。

⑨ 『当代記』慶長八年二月六日の条、『池田家履歴略記』慶長八年癸卯「賜備前、任少将、與国公監備前」の条、『寛政重修諸家譜』卷二五六「池田」。

⑩ 『池田家履歴略記』慶長十五年庚戌「賜淡路」の条、『寛政重修諸家譜』卷二六五「池田」。

⑪ 『駿府記』慶長十八年正月廿九日の条、『当代記』慶長十八年正月廿五日の条、『池田家履歴略記』慶長十八年癸丑「国清公薨」の条。

⑫ 『池田家履歴略記』文禄三年甲午「良正院殿入興」の条。なお、同書には督姫死去の場所を伏見とし、そのほか『徳川幕府家譜』には播州姫路、『寛政重修諸家譜』卷二六三「池田」輝政の条にも姫路としているが、いずれも誤りである。

⑬ 『良正院文書』第三〇号「良正院覚書案」。

⑭ 良正院夫人の墓は、知恩院山内、法然上人御廟の東の裏山の中腹に、西向に建てられており、惣高五尺八寸八分の五輪石塔で、「慶長廿年二月五日、良正院殿智光慶安大禅定尼」と刻まれている。

⑮ 『良正院文書』第三五号「良正院覚書」。

⑯ 『駿府記』慶長廿年六月廿八日の条、『寛政重修諸家譜』卷二六五「池田」。

⑰ 『池田家履歴略記』元和二年丙辰「與国公薨、烈公嗣」の条、『寛政重修諸家譜』卷二六三「池田」。

⑱ 『良正院文書』第三二号「慶安寺興誓書上」。なお慶安寺は、その後、寛永九年池田忠雄が死去し、嗣子光仲が因幡鳥取へ国替えとなった時、慶安寺も俱に岡山から鳥取城下へ移された。

⑲ 『徳川実紀』大猷院殿御実紀、寛永三年九月十三日の条。

⑳ 『寛政重修諸家譜』卷二六五「池田」。

㉑ 『本光国師日記』寛永九年卯月三日の条、『因府年表』寛永九年四月三日の条、『寛政重修諸家譜』卷二六五「池田」。

良正院古文書選

〔一〕 浩翁軒九感領分書上

(花押)

知恩領之内

浩翁軒九感領分

さんじきてん

上田

沓反六畝

式石五斗六舛

浄土寺白川

源次郎

同所

上田

沓反五畝六歩

式石四斗参舛式合四勺

同 人

広小路

上田

沓反拾歩

沓石四斗四舛六合七勺

祇園 宗春

山王ノ前

上畠

拾歩

四舛

同 孫四郎

林ノ南

上畠

沓畝拾歩

沓斗六舛

同 新助

くちなへのつし

上畠

拾八歩

七舛式合

同 与兵衛

林ノきわ

上畠

四畝廿歩

伍斗六舛

同 竹

みぞかき

上畠

三畝十式歩

四斗八合

同 備中

双林寺ノ道

上畠

式畝十七歩

参斗八合

同 助三郎

谷ノ向

中畠

沓畝十八歩

高台寺屋敷ニ成
沓斗七舛六合沓勺

同 与左衛門尉

(壺印)

(紙継目)

(壺印)

わしの尾
下畠

六畝廿八歩 同

六斗九舛参合四勺

同
弥三郎

荒分

高六斗九舛三合之内 式斗五舛八合琳忠分
参斗七舛五合院分

わしの尾
下畠

六畝廿八歩 同

六舛耆合

同
幸 円

高六斗之内 参斗五舛三合春甫分
残而耆斗八合九然分

さんじき田

耆斗式舛九合

浄土寺

彦三郎

茶えんの下

耆斗八舛

同
白川 少将

荒分ノケ

八石八斗五舛六合六勺 (壺印)

荒ヲソへ

合九石式斗式舛六合六勺 歟 (壺印)

文禄式 癸巳 年九月廿五日 (壺印)

〔二〕 観智国師源誉存応書状 (折紙)

以上

(ウハ書)
一書

増上寺

宗把老

出世之仁有之付而、一書差添越申候、早速 綸旨頂戴申
様ニ、其元肝煎尤候、委細彼可在口上候、早々恐々謹
言、

観智国師

八月六日

源誉 (黒印)

〔三〕 増上寺正誉廓山書状 (折紙)

尚以、乏少ニ候得共、帷子一重、祝義迄ニ候、以
上、

一書申入候、明朝帰洛之由承候間、方丈へ之御報、并為御祝義、金子寺兩令進上候、可然様ニ披露願入候、將亦、先日具ニ雜談如申候、(徳川家康)相国様御壁書之通、少も違背無之様ニ、方丈へも能々可被仰上候、出世之添状無之衆、綸旨之取次被成候者、以來之法度立間敷候間、左様之未断之儀於有之者、從此方之添状一切可令停止候、其御心得可有候、委細嶺笛口上ニ可被申候、恐々謹言、

増上寺

(寛永元年)
五月廿一日

正誉(花押)

宗把公

参

(追筆)

(寛永元年)
「甲子在江戸、上洛之刻にて候御状也、出世添状

にてハ無之候、法度之儀不破様可然と使也、」

〔四〕尼子金右衛門尉書状(折紙)

尚以、旧冬者、被入御念候御報、忝存候、慥ニ相届申候、当年者、早々御礼かた／＼ニ御飛札可申上処ニ、手前何かと取紛、御ふさた、中／＼書中ニ難申

尽候、其段御免可被成候、頓而わさとはより可申上候間、早々申上候、以上、

從報恩寺、使僧を以被申入候条、致啓上候、新春之御

慶、万々可被謝尊意候、然者報恩寺年頭御礼之儀ニ付、

旧冬方々へ御状被遣候、当春何も被相達、御報共持せ被

為進之旨ニ候、於様子ハ黒田出雲かたより具ニ申上候

間、私より不及申上候、(池田忠雄)宮内少上京可被申候、供仕候

者、尚以様躰口上ニ可得御意候、私不罷上候者、報恩寺

旦那衆供被申候間、委口上ニ被得御意候様ニ可申談候、

(荒尾)荒内匠供被仕候間、御参会之刻、報恩寺へ新地被申付候

御礼と、年頭之様子、無相違様ニと可被仰談候、鉄道、

私より能々相心得申入様ニと被仰事候、宮内少被罷上候

節、必々右之兩条、内匠へ被仰談可被下候、尚期後音

候、恐惶謹言、

尼子金右衛門尉

(寛永三年)
二月廿五日

□(花押)

知恩院

宗把様

人々御中

〔端裏書〕

「寛永参年三月、備前報恩寺直末繼目御礼遅々仕候、為御届使者之時、尼子次左衛門尉より給候文、」

〔五〕専称寺円誉書狀（折紙）

以上

去冬報恩寺使僧被上候節、預御書、忝致頂戴候、就其、
宮内輔少殿御礼、出世次第之儀被仰下候、爰元御奉行へ
茂御狀被遣候間、定而別儀御座有間敷候、正覺寺談合仕
候而、奉行衆へ紙面之趣可申入候、随而愚僧二三ヶ年以
前入院仕候へ共、不致登山、背本意、迷惑仕候、何茂罷
上、御礼可申上候、恐惶謹言、

（寛永三年）

二月廿五日

円誉（花押）

（ウハ書）

岡山専称寺

浩翁院

御報

〔六〕報恩寺文佐書狀（折紙）

知恩院塔頭良正院の草創

尚以、但馬殿父子之御報被遣候、旧冬御書被遣候
故、爰元公儀向、一段首尾能、諸旦那も忝由被申
候、早々御礼ニ可罷登之處ニ、右如申上候、別時故
延引、我等大咎者ト可被思召ト致迷惑候、頓而く
罷登、御礼可申上候、
追而申上候、御本丸御ツホネ様へ之御狀、早々上ヶ
申候、此度御隙入候而、御報無御座候間、跡より御
返事取可進之候、以上、
旧冬者罷登、初而得尊意、始中終御懇切之段、難筆紙申
上候、内々如申上候、正二月之内ニ、鉄道長老致供、御
礼可罷登之處、正月十九日より四十八夜別時被頼候故、
延引致迷惑候、余御無沙汰故、先飛脚を以申上候、来月
中ニ必々罷上り、御礼可被申上候、将又、荒尾但馬殿父
子へ之御書之通、宮内少殿へ御披露之處、菟角御本寺之
御作法次第ト被仰候、是又尊老様之御懇志故と忝候由、
諸旦那も被申候、宮内少殿も頓而上落被成候条、弥々其
節御口説可忝候、恐惶敬白、

文佐

（寛永三年）

二月廿七日

□（花押）

四三

進上

浩翁院様

御同宿中

〔端裏書〕

「寛永三年三月、備前岡山報恩寺直末繼目御礼遅

々仕候、先為届使僧上洛候刻、備前報恩寺之内、文佐より文、

〔七〕本部五郎右衛門書状

一書申上候、先度者、宮内少方より法定様〔方丈〕へ為使者参上

仕候間、乍次而、御尋申上候処ニ、御煩之由にて不懸御

目候つる、其後、宮内少所へ御出之由候つれ共、不時ニ

て不得御意、于今御残多存候、然者備前報恩寺早々罷被

上、御礼可御申上儀候を延引、近比々々めい、わくニ存

由、此比も又被申越候、やかて可被上由候へ共、其内ニ

も御次而候へ、於御前、可然様ニ御取成、於我等奉頼

存候、将又、黒田出雲・尼子次左衛門尉状こし申候間、

もたせ進上申候、明後日たしか成便宜御座候間、返事可

被成候、明晩御状取ニ進上可申候、兩人方へ御返書御〔端書〕は

しかきニ、ほうおん寺とまで不被上儀へ、くりしうまか〔報恩〕

せ被仰遣候へ、於我等可忝候、延引之段、坊主少も如

在にて無御座躰、我等よくく存候間、右之通奉頼候、

随而ほうおん寺事、宮内少へ此度急度御取合奉頼候、御

末寺にて候間、万事可然様ニ被申付様ニ、ほうでう様〔方丈〕よ

り御頼被成なと被仰入候へは、尤珍重存候、鉄道よき

僧にて御座候ゆへ、且那大せい存付申候ニ付、年寄とも

も、ちそうにて御座候、宮内少も無如在被存事ニ候、其

御心得可被成候、様子之儀、面上之刻、万々可得御意

候、此比おかしく候へ共、柿一折進上申候、任到来候、

恐惶謹言、

七月廿八日

直〔花押〕

〔ウハ書〕

松平宮内少内〔池田忠雄〕

本部五郎右衛門

〔封〕宗把様

参

直

〔端裏書〕

「寛参年七月、直末寺成ルニ付、備前報恩寺御礼

遅々申候、為御届理り文、

」

〔八〕浩翁院規式

（端裏書）

「浩翁院裏之法度書」

浩翁院之格式 示 三三子

- 一、真前每日行時、無間斷可相勤事、
- 一、当院行時并茶湯、毎日無懈怠相勤、仏壇掃拭香燭之具、一日一夜為輪番、慇懃可相勤事、
- 一、仏前・真前并祠堂茶湯、無懈怠可致焉、其晡時、諸道具致点檢、可請取渡事、
- 一、非番之僧者、院内戸障子開闔、堂中処々掃可務焉事、
- 一、行有余力、則以可習復、仏經・學書可相努事、
- 一、方来之知識登山之時、如有当院之光貴、其時当厚礼尊敬而、慇懃可接待事、
- 一、院主他適之時、方来有使者、慇懃相接而、謹聽其言、受其事、而当帰院之時、毫釐無忘却、可奏達事、
- 一、表之縁、三日一遍可洒拭事、
- 一、眠藏・廊下之掃地、並諸道具、三日一遍点檢、無失墜破損、可請取渡焉事、
- 一、庫司辺、一日一夜為輪番、諸用可申附事、

一、（婦）嫗者、或雖親屬、女子寮内許容、一切堅禁焉、男女之別、人倫之大方也、

一、亡人之止宿、留連、雖一朝一夕、不可淹滯、是国家之大禁、人々所知、非吾一人之法制乎、

一、朋友同類之人、扱而後可交、与善人、則如入芝蘭之室、不染而自馨、侶惡友、則如游鮑魚之廬、不親而時臭、孔子曰、益者三友、友諒、友直、友多聞、益也、友便辟、友善柔、損也、以飲狎戲謔相交、則何終不疏乎、唯以切磋琢磨為相与、則久而信友、以其德可友、曾子曰、以仁輔友、以文会友、誠哉斯言也、

一、寺内並他処之賔客、無貴無賤、不挾富不挾貧、以礼義慇懃可接待之事、

一、不可說人之短、唯反己軀而可求仁、崔子玉曰、莫言人之短、母說己長、施人而母思、受施而勿忘矣、以是可為座右銘也、

一、仏殿出仕之時、不可寄他処事、

一、院之門外、妄不可出、如有用要者、断院主而後可往、一衣不可離身、古昔沙門一衣一鉢不離躬者、仏門之軌範也、

一、院内、盜賊之難、失火之害、無間斷可防之事、

右条目之件々、一事不可違犯焉者也、

維時寛永六載(四月十五日)己結夏日

浩翁院主宗把謹識焉

〔九〕池田忠雄書狀

為

良正院殿御追善、

(德川秀忠)
相國様江

窺之上、其寺建立候、御供養米五拾石、永々可

差贈候、猶於

御仏前、武運長久・国家安全之祈願願入候、永其寺可為

檀那候、恐惶謹言、

(寛永七年カ)

十一月朔日

宰相

忠雄(花押)

良正院

宗把老

〔一〇〕良正院宗把書狀案

猶以、為良正院様御追善、末代迄之御造宮被仰付

義、可被思召御満足奉存候、弥從宰相様被仰付候武

運長久・国家安全之祈願、永可抽丹誠候、以上、

態一書申上候、宰相様別而御安鉢、御機嫌能被為成御

座候由、目出度奉存候、爰許被仰付御作事出来、三奉

行衆当月十九日ニ御国江被罷下候事、

一、貴賤之諸人、寺拜見仕、上方無双之為御建立旨、申

候而戴申候、永代浄土一宗之外聞不過之由、知恩院被

申、則以書狀被申上候、誠以我等冥加之至、忝仕合、難

及言上候、各迄得御意、彼地可罷移奉存候得共、先度

吉村忠右衛門殿、將亦三奉行衆任御異見、移申候事、

一、三奉衆(行説)、日夜諸法度以下迄、能被申付故、大分之御

建立御座候得共、少も出入無御座、一段無事相濟申

候、三奉衆昼夜苦身難申上候、此辺僧俗共、此等之義

迄感入仕候事、

一、座敷金間、殊更絵之儀、三益被振筆勢、京都見物之

貴賤、是又驚目候、乍慮外、達宰相様高覽度奉存候、

万事被為入御念、難有旨、僧俗共奉存候、三奉無油

断、掛大事、苦勞被仕候通、御取成候而可被遣候、

一、爰元之様鉢、委悉大森弥次兵衛より可為言上候事、

一、尤罷下、雖御礼可申上候、近日御国江可被成御座候

間、令延引候、右之趣、御次之節、御前宜預御取成候、恐々謹言、

(寛永八年)

王十月廿五日

宗把(花押)

荒尾志摩守殿

山田 茂庵老

安倍源五左衛門殿

此外ニ別帶ニ申入候事

別而令申候事

一、末代迄、上方無双之愚寺御建立被仰付、忝仕合も、数年貴老御取成故と、過分之至、中々難及筆帋候、定而貴老も可為御喜悅存候、迎之儀ニ、向後も宰相様御前向之儀、宜預御指南候、偏頼存候事、

一、御国も一段無為之由、承及候事、

〔一〕良正院宗把書状案

知恩院炎焼之次第

覚

一、当月九日亥刻火事出来、一番ニ宗把、方丈へかけ

入、火本へ参候処ニ、早小方丈北かわ過半火移申候、方丈火中へ入候へんと被仕候処ヲ、沙汰之限之由申、

引留、人ヲ付候て、則宗把儀ハ奥へはいり、両御所様

御朱印、諸灵宝不殘、権現様より拝領之連署、悉取出

し申候而、さて跡を捨置、大御影堂ヲ大事ニ奉存、参

候而、方丈并寺内之衆中、一心院住持、近辺之衆、我

等共、随分御影堂北之廊下取切候へんと仕候処ニ、周

防守様御家中之衆、木ノ下宮内殿御かけつけ候而、何

も被入御情候へ共、時刻到来か、大御影堂炎焼申候事、

一、丈室和尚、于今無十方上ニ病氣、何も笑止ニ存候、

其内ニも他国之住居をも可被仕と被存候得共、皆々達

而抑留仕、光照院ニ隱便之跡ニ而被為居住候事、

一、御忌前無余日ニ付、法事等之儀、門中談合被仕候へ

共、方丈ハ取乱之上に病氣、第一公儀之憚、彼是を

以、難被及返答ニ由候、就其、門中衆被申へ、いにし

へも加様之儀出来之刻も、終ニ法事無懈怠執行仕候、

先例候間、隱便以少執行可仕旨、何も被申候事、

一、於当地者、從御公儀、如何様ニ可被仰付候不奉存

候、(京都所司代板倉)周防守様御機嫌、彼是以、皆々昼夜氣遣、別而我

等之迷惑可有推察事、

一、爰元焼跡、松平越中守殿・同紀伊守殿御無心申上、人足等被仰付、焼瓦此中取申候、然共、未皆迄ハ取不申候事、

一、周防守様御機嫌、氣遣千万ニ存候間、御小性中迄も、以書状申入儀も不罷成候事、

一、千一、其元へ誰ニても罷下候而、爰元様躰申上候而も、周防守様尤ニ可被思召候哉、其方達之一分ニ而、そと御口引も被相聞候へん哉、於爰元、方丈之儀者不及申ニ、万民、別而我等共迷惑、中々、難申尽候、公儀向おそろしく奉存候間、少成共、周防守様御ことは(言葉)のはつれも、や(柔)へらかなるやう(様子)す不承候ハ、中々、罷下儀ハ存も不寄候、此段御分別尤ニ候、委ハ喜右衛門可申候、恐々謹言、

良正院

(寛永十年)
正月十三日

宗把(花押)

源察老

九達老

〔一二〕良正院宗把書状案(折紙)

態一筆令申候、知恩院当月九日亥刻就炎焼、方丈者半死半生之躰候、從我等、即刻周防守様迄者、(板倉)以飛札申上候、拙僧茂忘却仕候付而、其節各江者不及愚翰候、爰元之様躰為可申入、喜右衛門差下申候、

炎焼之覺

一、方丈 大小二

一、衆寮 三

一、廊下 十四

一、庫裡 大小二

一、衆会堂

一、大御影堂

一、樓閣

此分致炎焼候事

右之外相殘分

一、古阿弥陀堂

一、勢至堂

一、同台所

一、経蔵

一、山門

一、^(豐)灵宝藏

一、雜藏

一、黒門

一、惣門

一、惣寺院中者、何茂不苦候、

九日之夜、周防守様へ申上候節者、別而無正躰故、書付可致相違候、委者喜右衛門可申入候、恐々謹言、

良正院

正月十三日

宗把(花押)

源察

九達

〔一三〕源察等連署書狀(折紙)

正月六日御飛札、同十二日晚参着仕、拝見申候、御年寄衆江之書狀、何茂不殘、我等共持参仕候、先可申上を、^(者力)其元方丈向炎上仕候儀、板周防守様御内衆より飛脚、今十三日江戸参着仕候、則周防守殿我等共へ被仰聞、驚入、^(案)昼夜共ニ安シ暮計に御座候て、夜茂ねられさる仕合

知恩院塔頭良正院の草創

ニ御座候、方丈様并御寺中衆御機色、乍慮外、奉察候、就其、僧衆・行者衆内老人成共、可指登と存候得共、とてもかへらさる儀と存、御法事向大事ニ存、執行仕候、爰元御法事相濟候ハ、早々我等茂罷上り可申上候、爰元様子、委者左右衛門可申上候条、不能具候、恐惶敬白、

(寛永十年)

正月十四日

源察(花押)

九達(花押)

雲岌(花押)

団郭(花押)

豊後(花押)

土佐(花押)

良正院様

〔一四〕鎮西善導寺団誉書狀(折紙)

猶々、右之様子相澄候様ニ、貴老頼入候、精心光寺可有演説候、以上、

態令啓一輪候、去春之時分者、知恩院就炎焼、聞掛ニ、使僧指登せ候処、在江戸ニ而御座候間、空致帰国候、定書狀届候敷と存事候、仍肥後国南蛮宗改ニ付而、一向宗書物、奉行所へ指出候、左様ニ候得者、浄土真宗と書出

候、就夫、隈本淨家門中之申分者、(加藤忠広)前肥後守代ニ者、一

向宗と書申候、如其被仰付候様ニと、数度越中殿奉行衆(細川忠利)

へ佗事申候得共、不相澄候間、御本山之為可得御意、彼

門中之内ヨリ心光寺上洛ニ而候、乍御六借、六条方へ被

成穿鑿、從古来之旧式敷、又新儀私曲敷、乍御太儀、御

尋所希候、宗旨之掟目ニ罷成候間、致添状候、此段方丈

様へ可然様、御披露所仰候、恐惶不備、

(寛永十年
酉)

九月廿三日

鎮西善導寺

団誉(花押)

浩翁院

宗把老

侍者禪師

〔一五〕善導寺団誉書状(折紙)

追、白銀五兩令進献候、誠輕微之至、補空書面迄候、

猶々鎮西之覚候間、自当寺、寺々へ申触、一国ニ一

人宛、上帳持せ納候而社、(ゴ)正当之御分別ニ而候、万

事可然様所希候、諸事善龍可申達候、已上、

態啓使札候、今年者、互不申通、其地御無事ニ候乎、承

度候、仍去年福岡極楽寺下向節、預芳翰候、其状ニ、諸

国宗旨寺々可被成御改之由、蒙仰候、但、從跡、精可被

仰越と書留候間、其状計ニ而者、触不被申候、其後到来

相待候処、為菟角儀無御座候、然処ニ、(ゴ)頃、豊前・豊後

両国直ニ御触状下候段申来、致仰天候、鎮西一派之於御

用者、当寺迄可被仰事、筋目之儀候、如何、兼日之御胸

中相違候、互無心元存事候、其故俄ニ善龍申付候、

方丈向可然様所希候、委曲使僧江申含候条、不能詳候、

恐惶不備、

(寛永十年)

拾月十七日

善導寺

団誉(花押)

良正院

宗把老

侍者御中

〔一六〕善導寺団誉書状(折紙)

猶々、住持定候者、繼目之参内之儀、万事頼入候、

細碎重而可申談候、已上、

改年之賀祥珍重々々申納候、仍其地永々滞留候事、御太

儀之至候、然者去年七月兩使僧歸國之砌、預書翰、精令
披見候、就夫、旧規并肥後・筑後兩國之門中以連判、彼
往生院、当寺為末寺儀明白之由、書物ニ而候、夫ヲ豊後
大超寺と申長老へ持せ、去年九月雖指登候、貴老在江戸
ニ而候条、残之役者、宗把無上落候際、我々計ニ而者難
澄候と、返札ニ而候、定此脇相済可申と存候、將又去年
荒増如申候、近年病氣指出候条、殊外勞倦申候際、可致
隱居格勤候、左様候得者、從前々申談候間、滿嶺和尚へ
可致付屬と存候而、今度使僧申付候、其地万事能分ニ御
相談所希候、恐惶不備、

(寛永十三年)
正月廿三日

宗把老

侍者禪師

善導寺

団誓(花押)

(追筆)

「寛永十三年三月十九日到来、於江戸披見、筑
後國善導寺より後住職ニ付、

」

〔一七〕善導寺善龍・太岩連署書狀(折紙)

尚々、鎮西ニ相当之衆、御相談奉頼候、いよ／＼九

芻ニハ覺之衆無御座候、已上、

乍惶致啓上一書候、当春之御吉慶目出度申納候、去年者
江戸へ被成御下向、御太儀ニ奉存候、早々御上洛ニ而御
座候哉、承度奉存候、然者当寺持病指出、殊外草臥被
申、隱居仕度被存候而、江戸滿嶺和尚へ後代之儀被申越
候間、万端奉頼候、此表へ相当之長老無御座候間、滿嶺
和尚此表へ御越難成思召候者、東國ニ而可然和尚ヲ、衆
中皆々大望奉存候、若貴寺様、于今在江戸ニ而御座候
者、鎮西ニ相当之和尚ヲ御才覺奉頼候、恐惶敬白、

(寛永十三年)
正月廿三日

善導寺内

善龍(花押)

太岩(花押)

進上 良正院様

御侍者御中

(追筆)

「寛永十三年三月十九日到来、但於江戸、筑後國
善導寺より御隱居望、後住持之儀ニ付、

」

〔二八〕満嶺和尚書狀（折紙）

尚以、右之通頼存候、以上、

一書令啓達候、仍鎮西善導寺より後代之儀付而、愚僧へ申来候得共、拙僧之事ハ罷不成候、左様ニ候得ハ、爰元ニ而可然仁、御下候様ニと存候間、貴殿思召寄之方も御座候者、彼之使僧へ御内談最候、則鎮西よりも御狀参候間、可然様ニ頼存候、増上寺へも此等之趣申達候、委敷ハ彼使僧可為口上候間、不能審候、恐惶謹言、

（寛永十三年）

三月十七日

満嶺（花押）

良正院

侍者御中

（追筆）

「寛永十三年三月十九日到来、在江戸中、筑後国

善導寺隠居望、後任職之儀ニ付、

満嶺上人より」

〔一九〕増上寺暁誉位産書狀（折紙）

尊書拝読、令得其意候、然者御綸旨副狀之儀、板倉周防守殿仰出之由ニ而、良正院名付ニ指上候へ由、尤奉得其

意候、自今以後者、良正院江指越可申候、恐惶謹言、

増上寺

七月廿八日

暁誉（花押）

知恩院

侍者御中尊報

〔二〇〕増上寺暁誉位産書狀（折紙）

書狀之趣、具令披閱候、六月廿四日板倉周防守殿仰出之由ニ而、御綸旨副狀、良正院名付ニ指越候へ由、尤自今以後、其分ニ認可進候、恐々謹言、

増上寺

七月廿八日

暁誉（花押）

良正院

御侍者中

〔二一〕浄運院閑栄等連署書狀（折紙）

猶以、南芸・良億兩人申上候、其御地方丈様より預尊書候、御報却而輕ニ存、無其義候、御次之刻、宜被仰上被下候、以上、

当十九日之飛札、忝令拝見候、然者御綸旨之役儀、周防

役者中

守殿御訴訟叶、先規之通、貴院江副狀參候旨、珍重ニ令存候、尤御紙面之趣、方丈江申上候間、可御心易候、夏中永々在江戸被遊、御苦勞被成候、乍去、首尾克御座候而、満足可被成と令存候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

淨運院

閑栄（花押）

七月廿八日

南芸（花押）

良億（花押）

良正院

御報

〔二二〕京都所司代板倉重宗書狀（折紙）

已上

新田大光院紫衣儀、從公方様被仰付候、御下行代銀、如目錄為持遣候間、可有御請取候、恐々謹言、

板倉周防守

霜月廿八日

重宗（花押）

知恩院

宗把坊

知恩院塔頭良正院の草創

〔二三〕老中阿部重次書狀（折紙）

尊書拝見仕候、仍公方様当夏少御不例、早速被為成御快氣、目出度被思召、以宗把被仰上候由、奉得其意候、御機嫌能被成御座候間、御心安可被思召候、随而扇子一箱三本入被懸御意、忝奉存候、委曲御使僧可為演說候、恐々謹言、

阿部對馬守

八月五日

重次（花押）

宗把

御披露

〔二四〕知恩院帝尊尊空書狀

猶待面上之時候、かしく、

改年之吉事、如書中申納候、次ニ一儀、今朝如申候、可然様ニ被計給候ハ、可為祝着候、恐々謹言、

正月五日

尊空

(ウハ書)

より

(封)

宗把老 へ参

尊空

(ウハ書)

へ参

(封) 良正院

尊

より

〔二五〕 知恩院帝誉尊空書状

猶以、及外見ニ候ハぬやうニ頼入候、

寸隙も有間敷内ニ、念入之書中、不過之候、万事何様ニ

も貴方へ任置候、御分別候て給候へく候、拙僧眼立者、
筆帋不尽候、能思召候て、御覽候へく候よし申給へ、か
しく、

初春七日

尊空

(ウハ書)

「(封) 宗把老

より

御報

尊空」

(ウハ書)

「(封) 宗把さまへ

返事

尊」

二日

(尊空)
(花押)

〔二八〕 知恩院帝誉尊空書状

早々申入候、

〔二六〕 知恩院帝誉尊空書状

西巖なと出候ハ、猶段合可申候、

昨夜者、間敷内ニ逐細段、満足不過之候、弥契約之通

ニ候間、万端可然様ニ頼入候、かしく、

七月廿四日

尊空

〔二七〕 知恩院帝誉尊空書状

書中具ニ拜見申候、昨夜者色々なくさみ、本望之至候、

随而青門主へ、唯今人を遣可申候、返事次第ニ可申入

候、かしく、

態令啓候、仍近日江戸下向之よし、万事出来候哉、定而

可為大儀候、随而少段合申度様子候、尤隙者有間敷なか

ら、被立出候而可給候はん哉、又それへ、なくさみかて

ら参候はん哉、返事待入候、何角面段ならては不得申

候、かしく、

(ウハ書)

へ参

より

(封) 宗把

尊

〔二九〕京都所司代牧野親成道中証文(折紙)

今度知恩院方丈就上京、為迎、寺中良正院罷下候間、路

次中船川渡之所々、無滞様、肝煎可申者也、

寛文四辰

五月二日

(牧野親成)

牧佐渡

(黒印)

從京都江戸迄

船川渡之所々

年寄

肝煎

〔三〇〕良正院覚書案

覚

扣

一、良正院様御儀、権現様為御見舞、二条御城江御上着
之所、御病氣、無御快氣、元和元年卯二月五日被遊御

知恩院塔頭良正院の草創

逝去候而、権現様御上意ニ而、御尊骸知恩院山御納、

御靈屋・御石碑御座候、

一、御葬送者、知恩院ニ而、其節之御導師、第拾九世

満善大僧正、

一、御逝去以後四年目、從松平備前宰相忠雄公、(池田)台徳院

様江、良正院様御寺御建立之御願叶候而、寛永元年御

普請成就仕候、当住者、願譽宗把、

右之通、手前記録来書と違無御座候、以上、

戌八月

良正院

慶安寺

〔三一〕慶安寺良感書上

覚

一、良正院様御義、権現様為御見廻、播磨より二条之御

城江御越被為成、元和元年二月五日ニ御遷化被遊、天

和式年迄六拾八年ニ成申候、其節御二男宮内將様淡路

御在城被遊、則於彼地、専称寺と申浄土寺へ、乾平左

衛門尉・安倍源五左衛門尉兩人を以、御位牌御預ケ被

為成候、同年二月廿三日ニ、備前ニ御在城被為成候御

〔池田忠雄〕^(尊) 捨領左衛門守樣、御遠行被成、御世次無御座ニ付、淡路ニ被成御座宮内將樣江備前國を被為進、専称寺茂御供仕、備前江參候、其後、宮内將樣御仏詣之折節、御香之火無之ニ付、以之外御腹立被為遊、阿倍源五左衛門を以而、隱居被仰付候、然所ニ彼隱居別寺建、是も専称寺と申ニ付、宮内將樣より御意成被下、淡路より御供仕専称寺者、良正院樣御戒名ニ而、山号・寺号改申樣ニと被仰付、則其節より智光山慶安寺と替り申候、

一、真教寺ニ有之御位牌、曾而無由事ニ御座候、於備前ニ而、左衛門守樣御病中、以之外ニ御座候得共、正覺寺と申浄土寺江仮ニ御位牌御立、御法事被仰付候、無程同月廿三日ニ御遠行被遊、其後、何之構茂無御座候、其已後、^(忠雄) 宰相樣御遷化被為成候ニ付、因幡江御國替被仰付節、慶安寺者、御供仕罷越候、正覺寺儀者、御國替^(三) 年過候て、和田飛驒殿御牌所故、跡を慕、只今より三代以前之住寺單嘗、因幡ニ參候、其時分、真教寺住持、主人を殺申者を囲、落申科ニより、追寺被仰付、暫無住ニ而候処ニ、彼單嘗と申僧、參合居申、飛驒殿

より御すへ被成候、其節、彼僧良正院樣御位牌を拵、正覺寺と寺号替候処ニ、町檀方打寄、中ノ寺号替候事不存寄義と、達而申ニ付、無是非、又真教寺ニ罷成候、ケ樣之儀ニ候へハ、良正院樣御位牌、真教寺ニ可有之子細、曾而無之事御座候、淡路以来根本之御位牌所者、慶安寺ニ相極候、以上、

天和式年

慶安寺

五月日

良惑（花押）

良正院

〔雪〕 灵嘗和尚樣

〔三二〕 慶安寺興嘗書上

智光山良正院慶安寺者、為播磨國主松平三左衛門輝政室、権現樣之御姫君之、所造立也、姫君樣元和元年二月五日、於洛陽二条城、被遊御薨去、奉法謚良正院殿智光慶安大禪定尼、則奉送葬于知恩院、

姫君樣御二男宮内少輔忠雄、此時領地淡路國仕候、依之、於淡州由良城下専称寺、被修追福供養候、其年宮内少輔軼淡路、領備前申候、依之、新ニ一字被致創造、号

智光山良正院慶安寺候、宮内少輔卒後、子息相模守光仲
軫備前、移因幡・伯耆兩州被申候、慶安寺亦因州鳥取江
引被申候、備前慶安寺跡、
為養林寺申候、当寺創造之開山、満蓮社円譽上
人魯頌和尚ニ而御座候、其後、(徳川家宣)
(徳川家継)文昭院様・有章院様御位
牌被奉安置候、寺領貳百石被寄附、經營以下不殘、従大
守被致沙汰候、従円譽至于野衲迄、六世罷成申候、以
上、

慶安寺（黒印）

七月

興譽（花押）

〔三三〕良正院靈譽書上

良正院開基

文祿二年九月廿五日

昔年者、浩翁軒善譽九感大德建立、

寛永元年松平備前宰相忠雄公、御母儀為菩提、有建立、

改号良正院、

深蓮社願譽宗把

当年元祿五稔迄百一年歟、

元祿五稔

良正院三世

壬申九月十二日

靈譽

御役者中

知恩院塔頭良正院の草創

〔三四〕良正院葵御紋由緒書

葵御紋由緒書

権現様御姫君御法号良正院殿、(池田重寛)松平相模守殿先祖池田三左
衛門尉殿宰相輝政御奥方、権現様江為御対顔上洛、於二
条御城、慶長二十卯年改号元和御逝去、御葬送之地、権
現様江被奉伺候処、知恩院江御入棺候様被仰出、則依上
意、当山江被為入候、其後、御子松平宮内少輔殿宰相忠
雄、権現様被準御子、賜松平姓、号御法号清泰院殿、山内江
良正院殿御位牌所御建立被成度旨、(徳川秀忠)台徳院様江被成御伺
候処、願之通被蒙御免許候上、当院御建立、御影・御位
牌御安置、則被称良正院候、依之、御仏具者勿論、院内
金物類・幕・挑燈至迄、悉葵御紋御用被成候、且御紋附
挑燈、御用之節、当院門外江差出来候、右之通御届申上
候、以上、

知恩院山内

明和五年九月

良正院（黒印）

御奉行所

〔三五〕 良正院覚書

一、権現様姫君様、初天正十八^(二)癸未年、北条氏直公江入興、氏直公死後、文祿年中、池田三左衛門輝政殿江御再嫁、然而慶長年末、從播磨國、権現様江為御対顔、二条御城江御上洛有之、御病氣之處、御養生不被為叶、元和元年二月五日、二条於御城御逝去、権現様上意ニ而、知恩院江被為入、奉葬東山上、奉号良正院隆譽——尼、

御影・御位牌、方丈御安置、御石塔、山上ニ有之候、

一、同四年、御子息松平宮内少輔宰相忠雄殿、^(德川秀忠)台徳院様江、良正院様御影・御位牌為安置、知恩院於山内、一院御建立被成度旨、被為奉願候処、願之通御免許有之、則於山内一院御建立、名良正院、御影・御位牌早速相移シ御安置之、御供養料五拾石寄附有之、供僧宗把申付候事、

一、御位牌殿・御石塔上覆ひ并御供所等、于今松平相模^(鳥取池田氏)守殿より修復有之候事、

〔三六〕 良正院由緒記

知恩院山内

良正院

一、良正院様と奉称候者、東照大権現御姫君、輝政公之御簾中、東照宮為御対顔御上洛、於二条御城、慶長式十年改号元和元年二月五日御逝去被成、御葬送之地、東照宮江御窺被成候処、知恩院江御入棺被仰出、依上意、当山江被為入候、其後、宮内少輔忠雄公、良正院様為御菩提、御寺御建立被成度、^(德川秀忠)台徳院様へ被遊御窺候処、御願之通被為蒙仰、御免許之上、当院御建立ニ御座候、則往古者、浩翁院ト申候地面ニ而御座候、一、良正院住職之儀、以東照宮殿命、本山役者宗把和尚へ被仰付候事、

東照宮三十五ヶ条之内、一ヶ条者、繪旨添状者、増上寺并檀林之兩判を以、知恩院へ可啓旨、被仰付増上寺国師へ、廓山を以、宗把ニ能々選儀可仕候之様、上意ニ而、觀智国師より、宗把弥肝煎申候様被申付、板倉周防守殿より被仰出ニ付、増上寺より当本山并良正院へ之書面、且増上寺役者より之書面有之、依之、只今

ニ至、右之通ニ御座候、

一、良正院様御供養料現米五十石、末代迄御寄附被遊候段、被仰渡候、然ル処、先年御国御城御焼失之節、半減被仰付、唯今ニ而者、現米三拾貳石ニ相成候、古来者現米五十石、当院庭付ニ被成御渡候処、右御国御大變後、御国渡リニ相成候、天明七年段々御願申上候所、内貳拾五俵、大坂渡リニ被仰付候事、（中略）

御影殿・客殿、惣金唐紙、挽手・釘隠・水引・打敷・幡・御膳具等、不殘葵之御紋付、御影殿・客殿等、惣檜木無節、柱者悉四方柱ニ而御座候、張付画、狩野三益筆、御朱印配当五石六斗余、

良正院様御納棺御廟所、知恩院山上ニ有、

右之通被遊御寄附候儀、公儀江御届申上置候事、

良正院御修覆、其外諸事御工作廻り、時々被仰付候事、

右之通ニ御座候、以上、

良正院

（この由緒記は、表紙に「京都寺院御由緒記」の標題のある冊子の内で、鳥取池田藩に關係のある京都の諸寺院から、その寺院の由緒を記して、京都の藩邸に提出したものの写しである。良正院の分は、寛政初年頃の書上げと思われる。）

